

On *Calorhabdos brunoniana* Bentham (Takasi YAMAZAKI)

中国・ヒマラヤの美穂草について (山崎 敬)

Calorhabdos is a monotypic genus consisting of *C. brunoniana* Bentham distributed in E. Himalaya to Szechuan of W. China (Fig. 1). In general appearance the species resembles those of *Veronicastrum* sect. *Leptandra*. Recently, Hong (1979) combined *Calorhabdos* with *Veronicastrum* and proposed a new name, *Veronicastrum brunonianum* (Benth.) Hong. *Calorhabdos brunoniana*, however, has tubularbilabiate and orange yellow corollas, and seed with hyalinous broad testa surrounding seed body (Fig. 2, a). *Veronicastrum* is characterized by tubular, bilateral-symmetric (not bilabiate) and bluish

purple corollas, and hemispherical seeds with thin testa (Fig. 2, b). The seed of *C. brunoniana* resembles that of *Picrorhiza* distributed in the Himalayas to W. China. Thus, *Calorhabdos* is regarded as an independent genus placed in an intermediate position between *Picrorhiza* and *Veronicastrum*.

Calorhabdos brunoniana Bentham, Scroph. Ind. 44 (1835); in DC., Prod. 10 : 456 (1846).

Calorhabdos sutchuensis Franch. in Bull. Soc. Bot. France 47 : 18 (1900).

Veronicastrum brunonianum (Benth.) Hong in Fl. Reip. Pop. Sinic. 67 (2) : 230, 401 (1979),



Fig. 1. *Calorhabdos brunoniana* Benth. Yunnan, Dali, Cang-shan, east slope at altitude of ca. 3000m. Aug. 1990. Photo. by J. Murata.

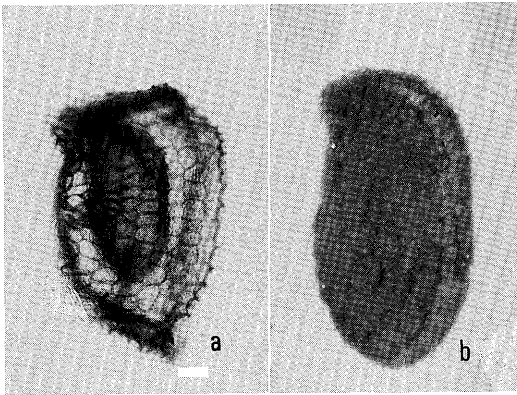


Fig. 2. Seeds. a. *Calorhabdos brunoniana*. b. *Veronicastrum japonicum*, $\times 50$.

syn. nov.

(Botanical Gardens, University of Tokyo)

ヒマラヤ東部から中国西部に分布する美穂草 *Calorhabdos brunoniana* はクガイソウに似て橙黄色の花をつける美しい植物である。洪徳元氏はこれをクガイソウ属に合一したが、本種の花は明らかに二唇形であり、種子は透明な幅の広い種皮が種子本体を包んでいる。この種子の形はヒマラヤから中国西部に分布し、2種からなる *Picrorhiza* に類似する。*Calorhabdos* は *Picrorhiza* と *Veronicastrum* との中間に位置する独立の属と考える。本種を雲南で撮影し提供して下さいました邑田仁氏に深謝します。

(東京大学理学部附属植物園)

ヘラハタザオとマンシュウクロカワスゲ (清水建美)

Tatemi SHIMIZU : Notes on *Arabis ligulifolia* and *Carex peikutusani*.

最近、長野県岡谷市の植物研究家今井建樹氏から、いくつかの標本の同定を依頼された。中に南アルプス釜無川産のヘラハタザオと八ヶ岳産のマンシュウクロカワスゲが含まれていたため報告する。

ヘラハタザオ (トダイハタザオ) 大井次郎博士は1951年、長野県上伊那郡長谷村戸台産の標本に基づき、トダイハタザオ *Arabis subpendula* Ohwi を発表されたが、その後博士自身この見解を変え (大井1954)、エゾハタザオ *A. pendula* L. と同種とされた。最近の日本の各種の植物誌や図鑑でも、トダイハタザオをエゾハタザオと同種とみる見解が多くとられている (例えば北村, 村田1974)。しかしトダイハタザオはエゾハタザオと異なり、葉はへら状長楕円形で鋸歯はほとんどなく、下葉や根葉でも基部は柄状にならず半抱茎し、先は鋭頭ないし鈍頭であって、長く先細りになることはなく、長角は十数個で少なく、果柄は長さ1-1.5cmでやや太く、そのため果実は開出してもたれ下がることはない。手元の標本は6個体から成り、いずれも花または果実をつけているが、草丈は20-40cm、下葉または根葉の幅は4-25mm、茎は単純なものも下葉の腋から何本も直立する枝を分つものもあって、植物体の姿や大きさには変

異が大きい。しかし、上記の主要な形質については変わりはない。

一方中井猛之進博士は1919年、朝鮮咸鏡北道からヘラハタザオ *A. ligulifolia* Nakai を記載されている。このほど基準標本を調べたところ、トダイハタザオの形質をすべてもっており、両者は同種とすべきものであることが判明した。和名のヘラハタザオは、本種の特徴を表現したよい名である。ヘラハタザオの基準標本は果期のものであるので、原記載には根葉の記述も花の記述もみられないが、釜無川産の標本を見る限り、根葉は数個あって茎葉より大きく、果期以前に枯れ落ち、花冠は長さ4mmで淡紫色を帯びている。なお、トダイハタザオの基準標本も果期のものであるが、原記載にはともかく根葉の記述も花の記述もみられる。

桧山 (1953) は、トダイハタザオが信州鉢形山および武州日原の石灰岩地にあることを報告している。戸台の産地も釜無川の産地もいずれも石灰岩地であるので、本種は石灰岩植物とみることができる。ただし鉢形山についてはよく分からない。トダイハタザオがヘラハタザオと同種であることによって、朝鮮半島と中部日本との共通種がまた一つ加わったことになる。トダイハタザオは、満